

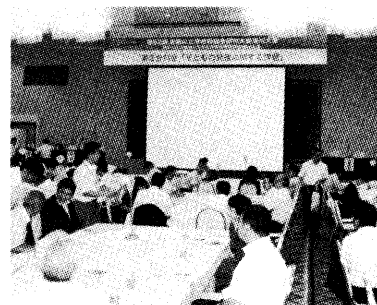
全国研究大会に参加して

第2分科会「子どもの発達に関する課題」

那須町立那須中学校 高久 昭彦

平成22年7月28日からの旭川大会に参加し、準備から企画・運営のすばらしさに触れ、北の大地の広さ、心の大きさや温もり、そしてたくましさで感動しました。

さて、2日目には第2分科会「子どもの発達に関する課題」に参加しました。小学校から中学校まで9年間の発達を考慮しながら、課題の洗い出しと解決への方策について8人の小グループで協議し合うことができました。そこでは、いじめが原因で中学生が自ら命を絶った事件をきっかけに、一人一人の子どもの人権を大切に取る取組を市内の全小中学校共同で取り組んだ事例。「豊かな心の育成」の実現に向けて、今までの教育活動を「捉えなおす」「再構築する」「束ねなおす」「つなぐ」をキーワードに教頭として『しかける』を進めた事例。中1ギャップに対応するために、小中の連携・接続を中心として開かれた学校づくりを推進した事例が発表されました。教頭として、教職員への課題の意識化、事業の形骸化・マンネリ化への予防、授業等の指導と助言等が関わりとしてあげられました。特に、3例目の北海道の帯広地区の事例は、我が那須町の研究にも大変参考になり、有意義な研修となりました。



第6分科会「副校長・教頭の職務に関する課題」

真岡市立真岡西小学校 大島 明子

大会1日目の全体シンポジウムに引き続き、2日目に分科会が行われました。分科会は、特別分科会2つを含む8分科会に分かれ、8会場において開催されました。旭川市民文化会館で行われた第6分科会では、滋賀県と地元北海道の教頭会より次の3つの提言発表がありました。

- ①学校の危機管理における教頭の職務と役割について～教職員や地域・家庭への教頭としてのかかわり方～
- ②生きる力をはぐくむ信頼される学校をめざして～特別支援教育の校内体制づくりと教頭のかかわり～
- ③豊かな学校づくりをめざした確かな教育活動の推進～学校改善の取組と「教師力」～

これらの発表のあと、8人の少人数グループに分かれ、課題について熱心に討議されました。

話し合い会場は、グループ同士が接するような決してよい環境とは言えませんが、日頃の悩みや課題について解決の糸口を得ることができた実り多い研究会となりました。また、全国各地の学校の様子についての情報交換により見聞を広めることもできました。

このような大会に参加させていただいたことに心より感謝申し上げます。

特別分科会Ⅰ「学校を学習する組織へ」～同僚性の構築と子どもの学びあい～

栃木市立藤岡第一中学校 中島 聖巳

特別分科会Ⅰは、「学校を学習する組織へ ～同僚性の構築と子どもの学び合い～」をテーマに、東京大学大学院教育学研究科准教授 勝野正章氏、富士市立田子浦中学校校長 稲葉義治氏、富士市立富士川第二中学校校長 野中秀敏氏を講師として開催された。

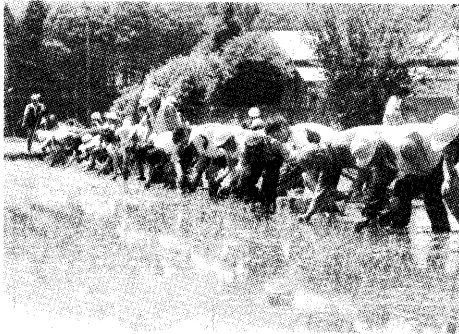
勝野氏からは、現代は教師の高齢化と年齢構成のアンバランスから、教師が育つ基盤の揺らぎが生じており、いま改めて教師の学び合いと支え合いが必要であるとのお話があった。稲葉氏と野中氏からは、実際の授業の様子をビデオで視聴した後にグループごとに授業研究会のシミュレーションを行うなど、実践につながる演習を中心とした提案があった。

本分科会を通して、「『同僚性』とは、授業を創造し専門家として成長し合う教師同士の連帯である」という佐藤学氏の言葉が強く印象に残った。

今後は、学校の同僚性を構築するための校内研修の充実や、教師が育ち合い子どもが学び合う学校の実現に向けて、教頭・副校長として、「知のマネジメントとしての学校運営」、「教師が聴き合い、褒め合い、認め合う時間と空間をつくる学校運営」、「多くのリーダーをつくる学校運営」を目指して努力しなければならないという決意を新たにしました。

「地域」とともに生きる篠井小

宇都宮市立篠井小学校 長谷川 智



本校は、宇都宮市の一番北にあり、明治6年創立という歴史と伝統、そして豊かな自然環境を生かした特色ある学校づくりを推進しています。その中でも、教育目標の「心身ともに健康で、自ら正しく判断でき、豊かな心を持ち、たくましく生きる児童の育成」をめざして、学校農園で米作りを行う「みどり活動」は、20年以上の長きにわたって続いている最も特色ある活動です。

まず5月に、保護者の方々の指導を受けながら「種蒔き」をします。一年前に獲れたもち米の種を一粒一粒丁寧にマスに蒔き、校庭

のビニールハウスで、縦割り班ごとに水遣りをして苗を育てます。6月は、いよいよ「田植え」です。地元の老人会「松寿会（しょうじゅかい）」の方々と一緒に、昔ながらの手植えで、泥だらけになりながら苗を植えます。地域の保存会の方々が、篠井に古くから伝わる「田植え唄」で、雰囲気さをさらに盛り上げてくれます。豊穰の秋10月には、黄金色の田んぼで「稲刈り」です。上級生は鎌の扱いも手慣れた様子で、下級生にも手取り足取り丁寧に教えています。そして11月には、待ちに待った「収穫祭（かさまつ祭）」です。日ごろからお世話になっている高齢者の方々をお招きして、盛大に餅つきを行います。つくたてのお餅と一緒に食べたり、音読や音楽の発表を聞いてもらったりと楽しい一日を過ごします。

このように「みどり活動」を通して、篠井の豊かな人間関係の中で、子どもたち一人一人の「育ち」が大切に見守られていきます。

伝統の緑化活動

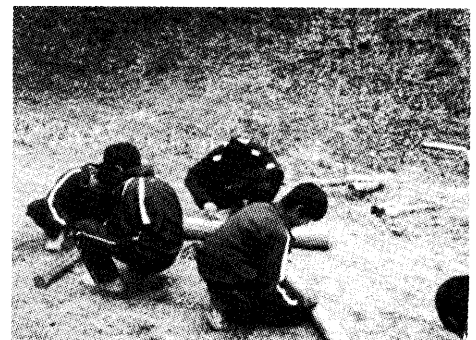
市貝町立市貝中学校 高 濱 齊

去る6月15日(火)、県民の日記念式典において、本校が優良学校として「心の教育及び環境緑化」の部門において表彰を受けました。先輩方が築いてきてくださった伝統を今もなお続けている、そのことが表彰を受けた一因であると思い、また、市貝中学校に関係された職員や生徒に感謝の気持ちでいっぱいです。

その伝統とは、一つには「あいさつ」です。「あいさつ日本一」をめざし、「あいさつは大きな声で人より先に心を込めて」を合い言葉に取り組んでいます。学校に来られたお客様からは、「大きな声でよくあいさつができますね、すがすがしい気持ちになります。」とお褒めの言葉をたくさんいただいております。

二つには、緑化活動における体験活動です。1年生で行っている足尾植林活動、椎茸栽培、2年生で行っているさつまいも栽培、そして3年生で行っている梅の収穫・梅林の手入れです。特に足尾植林活動では、荒廃した山に苗木を植え、学校林などの緑化活動との関連を図っています。また、2月には椎茸の原木に椎茸の菌を入れ、学校林に並べ、椎茸の収穫を行っています。5月のゴールデンウィークには、町のイベントである芝ざくら公園祭に参加し、学校で栽培した椎茸やほだ木の販売も行っています。

1年生だけの紹介になりましたが、このような活動が認められ、「これからもしっかりやりなさい」ということと受け止め、全校一丸となってさらに充実した取り組みをしていきたいと思ひます。



椎茸の菌入れ

研究熱の高まりを感じる研究総括の年

下都賀A地区小中学校教頭会長 佐藤 義明

下都賀A地区教頭会は、壬生町と下野市、そして昨年度末に1市3町が合併した新栃木市の一部の地域の小中学校51校（小学校37校、中学校14校）で構成され、3つの小学校ブロック（旧栃木／下野／壬生・都賀）と2つの中学校ブロック（旧栃木／下野・壬生・都賀）に別れて活動しています。

主な活動は、全会員が集まる年間4回の研修会（総会、ブロック研修会、研究発表会）です。研究発表会は、下都賀B地区と合同で毎年10月下旬に開催され、A B各地区の代表ブロックが県教頭会研究大会のリハーサルを兼ねて発表します。

本教頭会では、「教頭の職務に関する課題」を受け、「外部指導との連携による効果的な学習の推進」「生きる力をはぐくむ学校づくり」「学校経営に役立つ教職員評価制度の運用」「教職員の同僚性」「学校力の向上」を各ブロックのテーマとして掲げ、学校教育の改善・充実や教職員の資質の向上へ向けた教頭のかかわりについて議論を重ねてきました。

今年度は、過去3年間にわたる「教頭の職務に関する課題」の総括の年であることと、第51回関ブロ教頭会が栃木県で開催されることが相まって、どのブロックも研究への熱の入れようは大変なものです。関ブロ栃木大会では、下野市の小学校ブロックが「生きる力をはぐくむ学校づくりと教頭のかかわりー特色ある学校づくりを通してー」という研究主題で発表することになっており、本教頭会としても、その発表に大きな期待を寄せているところです。

昨今、下都賀では「同僚性」という言葉が多くの教員の口に上るようになりました。本地区の教頭会の研修の様子を見るにつけ、単なる言葉を越えた同僚性が十二分に発揮されていることを感じ、本年度会長を引き受けた身としては、何とも誇らしく思っています。

「同僚性」の高い教頭会をめざして

下都賀B地区小中学校教頭会長 舘野 将夫

下都賀B地区小中学校教頭会は、旧大平町・岩舟町・旧藤岡町・野木町・小山市の教頭62名（小学校45名・中学校17名）で組織されています。

本年度の研究主題は「生きる力をはぐくむ 豊かな学校をめざして」、研究副主題「施設設備、事務の管理の視点から」3年計画の最終年次となりました。

今年11月11日・12日開催の関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会栃木大会（兼栃木県公立小中学校教頭会研究大会）では、小山市中学校部会が3年間の研究成果を発表することになっています。

この研究を通して、会員相互の研鑽と親睦を深めることができます。その成果例として、昨年度、本地区においても、多くの小・中学校で新型インフルエンザによる学級・学年閉鎖・学校行事の変更等、それまで経験したことの無い事態が発生しました。危機管理が最大の職務である教頭にとって、迅速な対応を迫られた一年間でしたが、流行前から予防啓発・発生時の対応策等の情報を研究会の話題に加えたり、メール等で情報交換し合いました。そして、いざ学級・学年閉鎖した学校からは、状況報告や事前の対応策の問題点（改善策）がメール等で提供され、より良い策で対処することができました。それを機に、研究課題以外の情報交換も日常的に行われるようになり、惜しみなく情報を提供し合う雰囲気（同僚性）が本年も続き、深まっています。このことは大きな成果だと思います。

次年度は、新たな市町村合併に伴い下都賀A・B地区組織について検討すべき時期を迎えることから、本年度、その道筋を下都賀A地区及び県教頭会との調整を図りながら進めていきたいと考えています。そして、さらにこの会に参加して良かったと思える教頭会になることを願います。

ひ る ば

みなトープ

鹿沼市立みなみ小学校 早乙女 敦子

みなみ小学校はまさに自然の宝庫である。東西を林に囲まれ、広い敷地内には1千本近い樹木がある。朝、車から降りると鶯の涼しげな鳴き声がし、いろんな種類の鳥が飛び立つ。時々、校庭を雉や野うさぎが歩いている。そして一番の自慢はオオムラサキが自然に生息していることだ。榎の葉が幼虫の、樹液が成虫のえさになる。どちらもたっぷりあるのだ。

残念なのは近くに川がないこと。そこで創立10年に造り、その後危険とのことでネットを張り侵入禁止になっていた「せせらぎ池と水路」を30周年の今年ビオトープに変身させることになった。金属のネットを外し砂利と土を入れ、大きな石を設置する工事は大規模になってしまったが、幸いPTAの役員の方に園芸業や造園業の方がいてご奉仕いただいた。そこに休耕田から水草を採集してきて植え付けた。奉仕作業で周辺の低木の伐採や草刈をすると、見違えるようなビオトープが出来上がった。もうヤゴもカエルも住んでいる。やがて虫も…。

7月8日の完成式には1000匹のめだかの放流を行う。立派な看板には子供たちから募集した「みなトープ」の文字が光るはず。ヤギの「みなみ」と一緒に完成を祝いたい。

そうなのです。ヤギもいるのです。近くまで来たら是非お寄りください。

ワクワクどきどき 感動の毎日

佐野市立城北小学校 山口 喜美枝

校舎を東から西まで歩くと、歩数計によれば196歩。本校は、校舎全長が138mある。やろうと思えば、廊下で100m走ができる。しかし、子どもたちは、右側をきちんと歩いている。

補教で2年生の教室に行くと、「教頭先生は、校長先生に賞状を渡すんだよね。」とにこにこしながら言われた。控えめにしていると思っていたが、賞状伝達時のことをしっかりと見られている。

「ぼくは、トモかヨシか。」と毎日にこにここと試しにくる1年生の双子の兄弟。試され続けて3か月。最近小さなほくろで見分けがつくことに気付いた。

「おはようございます。よし、今日は教頭先生より先に挨拶できた。」と、元気に挨拶をして得意そうな顔を見せる4年生。明日は負けたくないぞ、と毎朝思う。

子どもたちには、毎日が新しい。850人の一人一人が、その新しい気付きを知らせてくれる。そして、一対一の関わりができると、遠くからでも視線を合わせ、にこっと笑顔になる。こちらの強ばった顔面も自然と緩んでくる。ちょっと疲れて出勤したときも、栄養剤のように元気づけてくれる。

学校は、ワクワクどきどき感動の毎日である。だから、また明日が楽しみになる。

南米の生徒を励ますために

足利市立山辺中学校 菊地 廣光

20年前に足利三中には、日系で南米出身の生徒が18名ほど在学していました。その生徒や保護者と交流を深めるために、南米音楽「フォルクローレ」を三中の体育館で演奏しました。1991年のことです。全生徒が喜んでくれました。三年間、同様に実施できました。94年から足利市民プラザで年に一回実施し、今年で17回目の演奏会になりました。

写真は、92年に愛知県の犬山市でフォルクローレフェスティバルに参加したときのものです。この時は、南米音楽の情報を得るために参加をしました。

また、地域の人を対象にケナ教室を公民館で月に2回行っています。地域の人たちと共に文化交流から地域交流を進めていき、縦と横の社会の連携を高めていきたいです。



編集後記

昨年は、8月に入ってから梅雨が明けた地方もありましたが、今年は、7月から猛暑と豪雨による被害が多発しました。

11月に関プロ栃木大会が予定されており、定例の会報発行が薄れてしまいそうのところですが、会員の皆様の御協力で31号も盛りだくさんの内容でお届けすることができました。御寄稿いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

次号は関プロ栃木大会特集号となる予定です。私たち会員一人一人が大会を支え、研究の成果がまとめられるようにしていきたいと思っています。(小林)